文芸部室の精霊様

浅田和哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
文芸部室の精霊様

【Ｎコード】
Ｎ８６９６Ｘ

【作者名】
浅田和哉

【あらすじ】
文芸部に所属する”見えない”先輩と”普通の”後輩の二人が送る、不可思議で非日常的な部活動風景。
いままで、後輩になにもしてやれなかった先輩が最後の最後に教えること。人を笑わせるとは？　人を泣かせるとは？
そして、夢を叶えるとは？
基本、笑い重視！

プロローグ

この学校の文芸部には、とある怪談じみた噂がある。
なんでも、部室に幽霊が出るらしいのだ……
って、いまどき誰がそんなことを信じるというんだ。幽霊？　上等だよ。
しかし、文芸部がおかしいのは確かだ。
二年も部員数がゼロなのに廃部にならない。これは、やっぱりなにかあるのかな。
一人の女子生徒が不安そうな面持ちで文芸部室の前に立つ。
こんなところで引き返すわけにはいかない。わたしは、高校に入ったら文芸部に入部すると決めていたのだから――――と彼女は、心を決めた。
文芸部活動一日目。長年使われていなかった文芸部室へと足を踏み入れた。

「おお、あんたが二年ぶりの新入部員かいな。よろしゅうな！」

文芸部室には誰もいない……はずだった。

「きゃあああぁぁぁぁあッ！！」

尋常ではない絶叫が静寂を引き裂いた。

01

一

静岡県の中心より少し左側に位置する町、藤枝市。
適度に自然が残っており、のどかで暮らしやすい土地だ。金比羅山、瀬戸川、蓮華寺池公園、ほかにもいろいろ。そんな環境もあってか、人々はみな穏やかで、豊かな心を持っている。
そんな藤枝市にたたずむ、ごく普通の高校《藤咲高校》通称、藤高。勉強もそこそこ、部活動もそこそこ、と世間からは《本当に普通な高校》などと言われているが、それは、間違っている。
藤高の文化系の部活を見くびらないでいただきたい。とくに創作系の部活は、全国でも通用するレベルだ。
白いボールを追っかけてすっ転ぶ野球部や、自分の足から放った強烈シュートを自分の顔面にヒットさせるようなサッカー部と一緒にしてもらっちゃ困る。
と、自分が文化系の部活に所属しているから日頃から熱心に説明している一人の女子生徒、宮沢秋文乃は、藤高に通う高校二年生。長く伸ばした黒髪と赤い縁の眼鏡をかけたごく普通の女の子だ。
趣味は読書と小説を書くこと。将来の夢は夏目漱石を超えるような小説家。所属している部活は、もちろん文芸部……なのだが、この文芸部が問題なのだ。
今もその問題の文芸部の部室に向かっている最中である。
秋文乃は文化部の部室が密集している部室棟の廊下をスラスラと歩く。周りは薄暗く、いかにも「なんか出そう」な雰囲気である。
そんな若干怖い廊下を歩き、一つの扉の前で立ち止まった。扉には文芸部と書かれている。
秋文乃は、文芸部に入部してから約一年間、ほとんど毎日のように

この扉をくぐっている。
秋文乃はドアノブを掴み、捻りながら押す。そして、

「こんにちはー」

と、誰もいない部室にあいさつをしながら入る。すると、

「おう、秋文乃ぉ、待っとったでぇー」

と、返ってくる関西弁。
しかし、部室には誰もいない。もちろん、秋文乃が自分で言ったわけではない。そもそも関西弁は、男性の声で聞こえてきた。
もし、秋文乃に「今の声はあなたのもの？」などと聞いたりしたら最後、文芸部員らしくハードカバーの分厚い本の角で殴られることだろう。
これが文芸部が抱えている問題だ。
いや、べつに秋文乃の暴力は違う。それはたいした問題じゃない。
問題なのは――――

「なぁ、秋文乃ぉ、今日はなにを読むん？」

この関西弁の主、皆川俊太郎だ。

02

誰もいない部屋から声がする。それだけで十分、幽霊の仕業にすることができる。
そのことは文芸部でも例外ではない。
実体がないのに声だけ聞こえる関西弁の彼、皆川俊太郎は、正真正銘誰がなんと言おうと幽霊だ。
しかし、関西弁の幽霊というのはどうだろう。なんだか間抜けで怖さを微塵も感じられない。
どうせなら「うらめしや～」なんて言って出てきたほうが、まだ怖いだろう。うん、きっとそうだ。
秋文乃だって、そんな俊太郎に今では、なんの怖れも抱いていない。
秋文乃は毎日のように俊太郎と会話し、笑い、楽しく過ごしているのだ。
今日も同じように。

「今日読むのはこれです！」

秋文乃は一冊の文庫本を誰もいない、真っさらな空間に突き付けた。
ちなみに、俊太郎が死んだのが高校三年生のときなので、秋文乃よりも一歳年上だ。一応、先輩なので敬語を使っている。

「おお！　今、話題になっとる、ごっつ泣ける本やないか！　どれ、わいにもちぃっと見せてくれへんか？」

「ダメです、今からわたしが読むんだから。今日、帰るときに置いてきますから、俊太郎さんはあたしが帰ったあとにでも読んでください」

俊太郎の頼みは、秋文乃に簡単に打ち返された。
おそらく、俊太郎はいじけているだろう。姿が見えないから、確かなことはわからないのだが。

「ケチやなぁ、秋文乃。おばさんみたいや」

「なんとでも言えばいいじゃないですか。わたしは読書に集中します」

秋文乃は、自分の手の平に包まれた本に目を落とした。
いよいよほったらかしにされた俊太郎は、秋文乃の言葉を真に受けて、

「やーい、あほんだら。ケチんぼー。クソババア人生まっしぐらー」

そんな子供な俊太郎に秋文乃は、大人な対応を――――

「なによ！　死んだくせに現世に未練たらたらで、文芸部室に取り付いて、場違いな関西弁振り撒いてる幽霊なんかに言われたくないわ！」

しようと思ったが、どうやら抑えられなかったようだ。

「なんやて？　何度言うたらわかるんや！　わいは幽霊やあらへん！　精霊や！　文芸部室の精霊様や！」
こちらはこちらでわけのわからないことを言っている。ちなみに、幽霊も精霊もたいして意味は違わない。
しかし、彼に言わせれば「幽霊は悪、精霊は善に聞こえる」らしい。
俊太郎は、こういうところが頑固だ。
二人の言い合いは、一時間ほど続いた。

二

現在、秋文乃は一人で活字を目で追いかけている。そして赤い縁の眼鏡の奥にある瞳からは時節、涙が零れている。

「はぁ、やっぱり泣けるわ。わたしもこんな小説書きたいな」

本を読み終え、独り言をぽつりと零す。

03

「秋文乃かて書けるやろ」

俊太郎が独り言に返答した。彼の声は今、秋文乃の正面から聞こえる。

「簡単に言わないでください」

秋文乃が声のした方向、誰もいない宙に言う。

透明な先輩は関西弁を連ねた。

「わかれへんで？　意外と簡単かもしれへん。そういえば秋文乃、小説書くのが趣味言うとったわりには小説書かへんなぁ」

先輩の指摘に思わず唸る後輩。いつか言われると思っていたがついにきたか。

秋文乃は、しぶしぶ話す。

「小説は家で書いてるんです」

「なんでや。ここで書けばええやんか」

そうはいかない。ここでは書きたくない理由がある。

「なんか理由でもあるんか？」

「聞きたいですか？」

「そりゃあ、まぁ」

これを聞いたら俊太郎さん、傷つくだろうな。
そう思いながらも、言わないわけにはいかなそうなので、なるべく彼を傷つけないようにソフトな言い方を選ぶことにした。

「わたし、小説書くときって一人で書きたいんです。近くに誰かいると集中できなくて。それなのに得体のしれな――幽れ――じゃなかった、精霊が隣から覗いてるかもしれないなんて……」

言い終えた途端に、絶叫のような声が轟いた。

「なんてこと言うんやぁーッ！！」

その声に驚いて、座っていたパイプ椅子からズルッ、ドテッ、ガツン！　と床と机で二カ所にダメージ。

「突然、大きな声出さないでください！　びっくりするじゃないですか！」

秋文乃は、頭と腰の少し下をさすりながら立ち上がる。「いててて」という彼女も痛そうだが、「得体のしれない」と言われかけた俊太郎の心も痛そうだ。
「ぐすっ、ずるる、ひっく、うぅ……」と泣いている音がする。姿が見えないので本当に泣いているのかは本人にしかわからないのだが。

「ほんまになんてこと言うんや。秋文乃の言葉――とくに後半のほうで、わいは、ごっつ傷ついたで」

「仕方ないじゃないですか。あれがわたしの限界です」

キッパリと言い放つ後輩になにも言い返せない先輩。惨めな幽れ――いや、精霊様だこと。

「まぁええ。秋文乃がそういうやつだってことくらい、わかっとったことや。そんなことより、秋文乃ぉ、小説は人に見てもらうための物やで？　せやから、わいに見せてくれてもええやないか」

彼の言葉は半分正解で、半分不正解だ。

まず「小説は人に見てもらうための物やで」これは正解だ。しかし、「せやから、わいに見せてくれてもええやないか」これは不正解だ。なぜなら彼は《人》ではなく《精霊》なのだから。

04

秋文乃は、そのことを言おうと思ったが、喉のところに言葉の端っこが来たところで止めた。
言ったらまた、この精霊は傷つくんじゃないかと、今度こそ後輩から先輩への思いやり。
秋文乃が自分の優しさに酔いしれていると、俊太郎がなにか閃いたように声を上げた。「そうや！」

「なにか思いついたんですか？」

「ああ、むっちゃええこと思いつきよった！」

その「むっちゃええこと」だって、先輩にとってのええことであって、わたしにとっては「悪いこと」なんでしょ。
なるべく俊太郎を傷つけないように、心の中で愚痴を言い、ため息をつく。
そして「むっちゃええこと」の内容を待つ。

「文芸部の活動で小説を書こうや！　わいかて、たまには先輩らしく後輩になにか教えたいわ！」

文芸部の活動で小説を書く、か。
予想していたよりも、自分に都合の悪い内容ではなく安心する秋文乃。
ついでに俊太郎が先輩らしいことを全然、まったく、これっぽっちもしていないことを自覚していることも知った。

「それに、わいの夢知っとるやろ？」

俊太郎の話はまだ続いていた。
彼の夢……秋文乃は必死に思い出そうとする。
あ、あれか。

「たくさんの人を笑わせ、たくさんの人を泣かせ、たくさんの人を満足させる小説を書くこと、でしたっけ？」

「そやそや、それや。わいは本気でその夢を目指しておった。なのに必死になって小説書いとったらそのまま過労死。あほかいな、わいは」

多分、彼は真性のあほだと思う。しかし、過労死するまで小説を書くという根性は本物だ。

「わいは死んでしもうたから小説は書けへん。せやけど、秋文乃に教えることは出来る。秋文乃に夢を託すことが出来る。むしろ秋文乃自体がわいの夢になるかもしれへん。どや、わいの夢を叶えてくれへんか？」

彼の必死の訴えに激しく動かされる秋文乃の心。
秋文乃のは無意識のうちになにもないはずの宙をギュッと両手で掴んでいた。

「先輩！　わたしやります！　先輩の夢、引き受けました！」

「おお、そうか！　おおきに、おおきに！　……って、秋文乃ぉ、なんでわいの手の場所がわかるん？」

自分の手を見ながら「えっ？」と、頭上にクエスチョンマークを浮

かべる秋文乃。確かになにか握っている。

「きゃあああぁぁぁあッ！！」

部室棟に響き渡る絶叫。

秋文乃は俊太郎の手を振り払い、文芸部室を飛び出した。

三

校内をぐるっと一周駆け回ってきた秋文乃は、ようやく落ち着きを取り戻した。

05

「いきなり叫びながら部室から飛び出すから驚いたで」

床に手をついて息を乱している秋文乃の背中に声をかける俊太郎。

「だって、まさか先輩に触れるとは思ってませんでしたから。なんかこう、透き通るのかと」

「せわなぁ、そう思うのも無理ないなぁ。透明やからなぁ」

「もう幽霊でも精霊でもなく透明人間ですね」

秋文乃が言った。俊太郎もその言葉に「うんうん」と頷いていたが、

「でもなぁ」と話し始めた。

「わいの身体はもっと特殊なんや。透明になってるときは物に触れられる。姿を見せてるときは物を通り抜ける」

それを聞いて「へぇー」と、秋文乃。

しかし、彼女は気づいた。

「先輩の顔見てみたいです！　見せてください！」

俊太郎は姿を見せることが出来ると言ったが、秋文乃は俊太郎の姿を見たことがない。彼女は得体のしれない、透明な先輩の顔に興味津々だった。

しかし、「ダメや」と一蹴。「なんでですか」と問うと、

「わい、めっちゃ不細工やねん。見せとうない」

「いいです。先輩が不細工なことくらい予想済みです。むしろ不細工じゃなかったらビックリです」

「なんやとぉーッ！」

またしても、後輩の正直な言葉に傷つく先輩。
秋文乃は、反省して「ごめんなさい」とだけ言うと、さっきまで座っていたパイプ椅子にもう一度腰掛けた。

「それと先輩。もう一つ気づいたことがあるんですけど」

「なんや？」

「先輩、物に触れるなら小説書けるじゃないですか。自分で夢を叶えられるじゃないですか」

彼女の意見は間違っていない。いや、半分当たってて、半分間違っている。

「そや。小説は書ける。でもなぁ、夢を叶えるには、たくさんの人に読んでもらわんといけん。でも死んでるわいには、そんな術がないんや」

納得。
と秋文乃の表情に出ていた。
精霊の彼は出版社に持ち込みしたり、賞に応募したりすることが出来ない。本にならない。つまり、たくさんの人に読んでもらうことが出来ないんだ。
秋文乃は頷くと。

「わかりました。きっと、わたしが先輩の夢を叶えてみせます」

と、もう一度、俊太郎に誓った。

「おおきに、おおきに！」

俊太郎は、思わず秋文乃に手を伸ばす。

「どこ触ってんですかッ！」

「いだッ！」

俊太郎は、ハードカバーの分厚い本で脳天をガツンと一発殴られて、おそらく床に沈んだのだろう。

「ど、どこって……肩やろが……。変なとこ触ったように言うなや……」

06

「突然、目に見えてない誰かに触られたら驚きますよ」

「なんで驚いたら即座に本で脳天突くんや」

なにか――おそらく頭をさする音とともに、俊太郎の声が床から秋文乃の頭の高さくらいまで上がってきた。

そして、「ふぅ～」と一つ息を吐き出した。

「ほな、明日から秋文乃に小説の書き方を教えようと思う。先に言うとくけどなぁ、わいが教えるのは、わいなりの書き方や。秋文乃の考えとかプロの人の考えとは全く違うかもしれん。それでもええな？」

「はい」

俊太郎がいるであろう宙に、短く、力強く返事をした。

辺りの木々が照れてるように赤く染まり、風も少し走り気味。人や自然が落ち着き、本なんか読むのにうってつけの秋。

不可思議な文芸部は、新たな活動を始めた。

四

翌日、秋文乃は雀のさえずりと母親の怒鳴り声により目が覚めた。

「もッ、ももッ、もうこんな時間！？　遅刻遅刻遅刻遅刻……

…ちこくぅーッ！」

呆れ顔の母親の前で、朝っぱらから盛大に叫び、彼女を起こすことに失敗した目覚まし時計を投げ捨て、制服に着替える。
チェック柄のスカートをはき、赤いリボンを締め、ブレザーを羽織る。

「はい、パス」

「ん、ありがとう」

母親の投げたトーストを見事に口でキャッチし、ボサボサの髪をとか――――そうとしたが時間がないので、そのまま。机の上にある赤縁の眼鏡を取り、かけてある肩掛けかばんを片手に、家を飛び出す。

「いってきまー……あッ、そうだ！」

一度は出た家に、また入り、自分の部屋に飛び込む。そして、机の引き出しから紙の束を取りだし、かばんに突っ込む。
そして、今度こそ、

「いってきまぁーッす！」

学校へと向かうのであった。

数分後、藤咲高校の二年四組の教室に、一つの怒ったような声が響く。

「なんで、お前は遅刻ばかりするんだ！」

「わたし、そんなに遅刻してましたっけ？」

二年四組の担任、中田の問いに、とぼける秋文乃。

「一週間連続の遅刻者が言うセリフか、それは！」

「だって、目覚ましが起こしてくれないんですよ？　仕方ないじゃないですか」

秋文乃は、藤咲高校において、連続遅刻の記録と最多遅刻の記録の両方を持っている。

夜遅くまで本を読んだり小説を書いたりしている結果がこれだ。最近、中田も怒るのが面倒になってきている。

「わかったから、早く席に着きなさい」

「はーい」

くすくす笑う生徒たちの席の間を通って自分の席に着く。

秋文乃の席は教室の窓際一番後ろと、授業を真面目に受けない者にとっては最高の席だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8696x/

文芸部室の精霊様

2011年10月28日07時18分発行